

平成19年度 秋高連総会における講演録

平成19年7月17日（火曜日）
アルカディア市ヶ谷

講師 学習院大学教授 佐々木 毅
(第27代東京大学総長)

演題 「私の育った秋田」



- 1 秋田の思い出
- 2 「官」から「民」へ
- 3 「民」の力を活用しよう
- 4 変化への対応
- 5 人生を二度生きる

私の育った秋田

1 思い出の秋田

本日、秋田出身の皆様にお話ができる機会を頂いた事に感謝します。私が東京に出たのが昭和 36 年、まだ集団就職が主流の頃でした。高校進学が全体の 2 割くらいで大学進学はとて珍しい時代、まだモータリゼーション以前でありました。秋田高校は秋田駅前にあり繁華街に近いこともあって社会勉強に適した便利なところでありましたが、その後山紫水明の地に移りました。学校というものは少々雑然としたところの方が良いのではないかと思います。高校 3 年のときは安保改定で世間が^{かし}姦ましく自分も口角泡を飛ばしていました。当時の村岡校長が子息を秋田高校に入学させず東京の高校に入れたことを話題にして校長の嫌がる顔を楽しんでいた生徒もいました。

高校時代の秋田は黒塀の家が立ち並びとても^{おもむき}趣のある町で、観桜会の時期にはあの広小路は人が溢れていました。同じ数の人口を広い地域に分散させると、人が集まる賑やか^{ことわり}なところが無くなるのは当然の理であります。住宅を郊外に、学校を山紫水明の地に移した都市計画は稀代の失敗だったと秋田に帰るたびに思う次第です。

当時は今に比べて高校数が少なかったようで先ほど内田高等教育課長からお話がありましたが、今は私にとって名前に馴染みのない高校がたくさんあるようです。又当時は高校に入学する人が少なかったし、進学したくてもみんなが進学できるという社会的雰囲気は無かったのです。学校数に比べ少子化が進んだ現下では俗に言う構造改革が必要となるわけで、課長が高校の統廃合の事をお話しましたがこれは正に構造改革そのものであります。

近年、進学率の向上は目を見張るばかりであり、選ばなければ何処かの大学には入学できる状態です。私は教育の世界に身を置いて来ましたが、ここ数十年の教育界は拡張に続く拡張でありました。ある分野では水膨れして心もとない分野もあるように感じます。しかしながら多くの方が教育のチャンスに恵まれたことは事実であり、いずれ何かの力になるものと信じています。

秋田との係りでは、現在秋田県総合政策審議会会長に就いており、秋田の現実をいろんな形で検分する機会を得て、その上で教育の問題も議論しています。魁新報に月 1 回「時評」^{いわゆる}を書いています、これが故郷秋田との接点の一つになっております。また所謂全国植樹祭を主催する団体の一つであります国土緑化機構の理事長を拝命しているのも、来年秋田で実施される植樹祭には両陛下を御案内する立場にあります。秋田県は今年わか杉国体、来年全国植樹祭を実施する事になるので大変だな、物入りだな、財政は大丈夫かと心配しているところです。

秋田はある時期から目を見張るように変化しました。自分の子供時代はモータリゼーション以前で、ようやく馬車から耕運機に変わった時代、いわば徳川時代とあまり変わってなかったのです。亡き父が稲を植える機械を発明したら大儲け出来るといっていたのを記憶しています。当時「田植え休み」というのがありました。この休みには宿題はないし、子供に出来ることは限られ、仕事は田植えをしている人に苗を放り投げる位で大変楽しいものでした。「田植え休み」は日本全国何処でもあったことなのですが、今は「田植え休み」に付いて知っている同僚も少なくなりました。これは「死語」に近くなってしまい寂しく感じています。当時は農作業を初めとしてすべからく手仕事であり子供も働かなければ

ならなかった。秋の収穫時に天候悪化が予測されたら子供も含め一家総出で夜を徹してはさ稲架がけしたり、家に取り込んだりしていたのです。今のように機械で刈りそのまま脱穀するような世界では無かったのです。これが私の思い出の秋田なのです。

2 「官」から「民」へ

先般、故郷で講演しましたが、同級生から要するに「自分の思い出の中にある秋田が一番良かったと言いたいのだね。」と指摘され苦笑しましたが、必ずしもそうではないのです。当時は東京都とか一部を除いて全国同じような状態にあったのではないのでしょうか。多くの子供は高等学校に行けない、行かせてもらえない、だから集団就職で都会に出て行き、働けば何とかなるといふ信念で自分の人生を切り開いてきたのです。たまたま、私の世代は高度成長時代に遭遇しましたが、これは運が良かったといわざるを得ない。これは日本の歴史の中で二度とないことでしょう。物事いろいろ選択できますが、人間は過ごす時代を選択できないのです。思い起こせば人生の大半が1950年代、60年代から80年代に合致した私の世代は、故郷の変化は変化として非常に運が良かったと思わざるを得ない。

ところがここ10年の間に種々の不具合が顕在化してきました。背伸びし過ぎたところに無理が昂じ、物事普通に進まなくなったにも係らず、変化に対応すべき頭の切り替えが進まない。謂ば上半身と下半身がばらばらだという現象が日本全国いたるところで見出され、多分に秋田も似たような事象が出ているのではないかと推測する次第です。

今の時代を昔と比較して明確に言えることは役所から良いアイデア、良い話がどんどん出てくるという時代は終わったという事です。つまり「官」の時代が終わり「民」の時代に移っているのではないかと思うのです。では「民」とは何なのかと考えると、これがとても難しく、この問題が各地域の抱えている問題の根っこそのものなのです。

「民は企業なり」だという小泉流の答えでは少しばかり表面的な捉え方で本質まで辿り着いていない。例えばある地域に上場企業が多くあるから元気だと言うのは一つの答えであります。では上場企業の無いところはどうするのだということになります。そこで我々は民の力は何かということを知らなければ前に進めない。

私は大学の管理者をしていましたが、大学は入学試験をやり4年後には社会に送り出すという組織であると悪い意味で達観した見方も出来ます。入学し卒業までに学生は将来役に立つことを全て身に付ける事は出来ない。しかし、何かを見つけるだろうし、それは単なる知識かもしれない。知識は知識として本人に役立つ知識もあるが、所詮知識は他人が^{しよせん}あって生きるものであります。社会が^{ろう}あって知識は生きるものであり、知識により人間が生かされるということになるのであろう。

「民」というのは人間の集まりである塊が組織化されてゆく過程において、その係り方が一律一辺倒ではないものなのです。愛知県のような多くの企業のあるところもあるし、無いところもある。無いところは策を弄する必要があるのは自明の理であります。しかし、例えば秋田というところは足の引っ張り合いの激しいところで最終的に自分も沈んでしまうのに足を引っ張り合っていると云われてきました。人間の塊が組織化されて行く過程で、例えて謂えば1+1が2以上になるのが民なのではないか。1+1がいつも2.5に成るわけではない。しかし、2以上にすることを常に心掛け、工夫しているのが民であり、民の力の原点なのだと思います。

この心がけと工夫・努力の仕方は個人的にそんなに違いは無いと思います。しかし、日々の心がけと工夫・努力の小さな違いの継続が20年、30年、40年経つと大きな差となって顕在化してくるのです。継続した結果の賜物がその地域の底力、地域力になるのです。物事順風満帆で推移している時には問題にはならないが、困難に直面したときにその差が出てくるのです。この観点から自分の育った故郷秋田ではどのような試みが成されて来たのであろうか。良いものいろいろあるが花火を一個ずつ揚げるようにしているのではないか、又、素晴らしいことをバラバラで実施し、中にはそっぽを向いているものがあるのではないかと危惧しているところです。

3 「民」の力を活用しよう

自分が育った頃の秋田は人口が多かった、多かったから東京に出たのも事実です。しかし、今は過疎化の進捗、高齢社会への推移で新しい問題が出てきています。世の移ろいは変化の連続、これからも絶えることなく変化してゆきます。このような変化の流れの中で秋田のほうから沸々と湧き上がるようなエネルギーが欲しいのです。東京にいる自分たちが盛り上げるのではなく、秋田が盛り上がり、それをお手伝いしその相乗作用で盛り上がり^{あお}が拡大するので無ければ意味は無い。醒めている秋田を遠方からやんややんやと煽り揚げに行くのは礼儀に反することになるでしょう。秋田での盛り上がりが進み、構想やアイデアが溢れ出で、その実現、具現に知恵やお金が必要だと言う事で求められるのが筋ではないでしょうか。極端に言えば、それぞれの地域は役所を通さないコネクション、民のコネクションを持たなければいけないのです。今までの様に役所に頼っていると役所が元気を無くすと連鎖的に元気を失くしてしまいます。これではこれからの社会では生き延びてゆけないのではないのでしょうか。

秋田では、教育、子育て等で活発な議論がなされており、財政的には大変厳しいです。現実に秋田県だけで、税金500円を集めようとしているのは地元の止むに止まれない声が出たものだと思います。財政に関する危機感の認識は明確だが、他方、未曾有の事態だから何か対処、対策を採ろうとしているかという点と具体的には良く見えてこないのです。

この平仄^{ひょうそく}のを合わせることになお、課題があるように見えます。

秋田の方でいろいろ検討すればする程、御参集の皆様の御協力やアドバイスが貴重になるのです。あくまでも秋田自らが盛り上りを見せるのが前提でありお節介と取られたら堪らない。好循環するように知恵を出して行きたいのです。このようなことを秋田で述べているのですが、上手く話が繋がらないので忸怩たる思いになることがあります。

故郷が大曲に近いので花火に興味があります。あれだけの汗と苦勞で造った栈敷ですが、一晩で終わるから忘れられないのだと言うのには一理あります。しかし、もう少し工夫する余地はないのか、30年近く宿泊場所が無いといい続けている現実、近くには角館や玉川温泉もあるが、それぞれが独立でお互いに関係ないと構えている。例えばこれらを結びつけ総合的に更に魅力ある秋田にする為には民の力を活用しなければならないと思います。

4 変化への対応

秋田がわか杉国体と全国植樹祭を成し遂げたら元気を失くしてしまうのでは困ります。これらは官製行事なので、この行事遂行でエネルギーを消費してしまうのは本末転倒であります。この行事から何かを学び取り次のステップに進んでゆかねばならないのです。

話を転じますと現代は大学の経営も国内競争では済まなくなりました。大学も国際化時代なのでグローバルコンペションを考えなければなりません。昨年のニューズウィークが発表したアメリカの調査機関による上位 20 校で英語圏以外は 16 位の東京大学だけでありました。大学は世界ランキングの評価を気かけなければいけない時代、ランキング上位は英語圏の大学が独占しており、英語そのものが資源になっています。又、英国の調査機関が発表したランキングでは旧植民地が多かったが、東京大学は含まれていました。どちらにしても東京大学は 14, 15, 16 にランキングされています。

最近、日本の高校生が日本の大学に進まずに海外に出てゆく現象が起こっています。こうなると日本の大学が逆に海外に学生を求めてゆかねばならないが、単に入学してくれれば学生は来てくれないので奨学金などを準備しなければいけない。海外の学生を取るには入学前の奨学金制度が有効なのであるが日本の奨学金制度は入学後支給が原則であり何も出来ないというのが現実です。

この 10 年の間に変化してきた一つに若い人が海外でチャンスを見つけようと出て行く事です。自ら安定した職場を蹴ってリスクのある場に進んでゆく、このようなことは自分の育った時代にはなかったことです。別の変化は大学受験までの困われた中での競争が、大学、大学院と進むに連れて誰と競争しているのか、何処の世界の人と競争しているのか不明となり不特定多数の世間を相手にしなければならないということです。

近年公務員人気は低下しています。組織は良い人材を集めなければいけない、その為には魅力ある職場で無ければいけない。公務員バッシングで任期が低下している中、良い人材を集めるには知恵が必要です。極端に言えば組織は人の奪い合いであり、又、組織が人材を生かせなければ組織は見捨てられます。終身雇用時代の我々と比べると、今の若い人たちは違った人生観、生き方を自分達で追求しようとしているのが良く分かります。

秋田県では高等教育に力を入れており、私はその顧問会議の一員であります。種々の懸案、新規の試みに付いて議論し、その具現に努力していますが、もう一段、二段の力を入れて頂かなければいけない。その際、環境問題、食糧問題等で今まで正しかった道筋が必ずしも正しくないという逆転の発想・見方が大切です。今一番好いところを追いかけて行けばよいというものではない。

故郷の抱えた問題はとても深刻でかつ重い、逆転も考えながら今の流れを止めないようにフォローして行かねばならない。大変難しい課題を抱えている秋田に厳しい要求をしていることにはなりますが、だからこそ秋田が盛り上がり我々に知恵を借りに来て欲しいものであります。

5 人生を二度生きる

長寿社会となった現下、我々は人生を二度生きるという考えを持たねばならない。第一の人生を終え隠居を決め込み年金を貰っていたら、それは勿体ないし、許されないし、許せないことであります。もう一度何かに挑戦してみましょう。1 回目は自分の生活の為、2 回目は世の為人の為に働くという気持ちで一人ひとりが行動すれば、これからの日本は変わるでしょう。秋田の人我々もこのような気持ちでがんばれば、我々と故郷の関係がより身近になり対話が自ずと広がって行くと思います。

日本はこれから転換期を迎えようとしています。この一世紀は戦争もあったし、高度成

長もあつたし、日本の歴史の中で異例の一世紀だったと思います。これからの一世紀は我々の知恵が求められる時代です。教育は知恵を生み出す感覚を養ってくれるのだから、しっかりとした教育は人生にとつともない広がりを持たせてくれる原動力になるのです。豊かな人生を二回生きる為には、終生心がけを良くしなければなりません。定年になって、第二の人生を如何するかではなく、常日頃から自分の能力を蓄える努力をしなければいけません。

本講演での佐々木毅先生紹介文

先生は 1942 年仙北郡美郷町(旧千畑村)生まれです。昭和 36 年に秋田高校を卒業、東京大学法学部を卒業、東京大学法学部助手、助教授、教授、法学部長そして 2000 年 12 月から第 27 代東京大学総長に 58 歳の若さで就任されました。在任間、国立大学の独立行政法人への移行期と重なり、大学改革に手腕を発揮されました。4 年の任期満了後から学習院大学法学部教授を勤められています。

日本における政治学・政治思想史研究家の第一人者で 2005 年秋には紫綬褒章を受章されました。著書には「政治学は何を考へてきたか」「マキャベリの政治思想」「今
じゅばく
政治に何か可能か」「プラトンの呪縛」等の単著の他、共著、編著、訳書を極めて多数執筆されています。

秋田魁新報社が伝えた
在京秋高連総会・懇親会記事

在京秋高連総会
高校生考案の「旗」披露
元気な秋田づくり誓う



在京秋田県高等学校同窓会連合会(秋高連)の本年度総会が十七日夜、東京・九段北のアルカディア市ヶ谷で開かれ、創立三十二年目にして初めて作られた「秋高連の旗」が披露された。

総会には県内四十五校の在京同窓生ら約三百七十人が参加。友成穂秀会

長が「秋田では今年、四十六年ぶりに国体を開くなど元気な秋田づくりにまい進している。秋高連でも会員相互の親睦を図り、秋田県勢の発展に向けて提言していくために具体的にどう取り組んでいくかを検討している」とあいさつするとともに、秋高連の旗について「能

踊りも披露された懇親会。東京・九段北

代西高、秋田南高、仁賀保高の生徒に図案を提案してもらい、それぞれのいいところを取った」と説明した。

佐々木毅学習院大教授(前東大総長)の「私の育った秋田」と題する講演の後、懇親会に移り、首

「秋高連の旗」。秋田杉をイメージし、地色は濃緑色とした

都圏秋田県人会連合会の煙山力会長の首頭で乾杯。参加者は母校の再編問題や運動部の活動などを話題に懇親を深め、最後は全員で「ふるさと」を合唱した。

テープ起し文責： 副幹事長 榎利美 (秋田南)

Toshimi1963@ybb.ne.jp